

〈研究ノート〉

鈴木恵一氏への《ふるさと》に関する聞き取り調査

杉本友梨・鈴木慎一郎

Interview about “Furusato” from SUZUKI Keiichi
SUGIMOTO Yuri, SUZUKI Shinichiro

キーワード：岡野貞一，《ふるさと》，鳥取，鈴木恵一氏，聞き取り調査

Key Words: OKANO Teiichi, “Furusato”, Tottori, SUZUKI Keiichi, Interview

はじめに

今日でも歌い継がれている《ふるさと》や《もみじ》等作曲した岡野貞一は、鳥取の出身である。表1に示した通り、岡野が鳥取で暮らしたのは、1893（明治26）年までである。その間に、大阪音楽学校（現在、大阪音楽大学）の創立者で、後に東京音楽学校（現在、東京藝術大学）の先輩になる永井幸次（1874-1965）とともに発声練習をしたり、教会音楽にふれたりしたことが、音楽を志す動機になっている。また、東京音楽学校を卒業してからも、東京音楽学校の教員としての仕事をこなしながら、聖歌隊の指導や教会のオルガニストとしての仕事、文部省唱歌編纂委員になるなど、その他にも多くの仕事を受け持っていた。このように岡野は日本の音楽教育の進展のために熱心に取り組んだ。この姿勢は《ふるさと》の歌詞とも重なる部分があるのではないだろうか。

岡野や《ふるさと》に関する先行研究に関しては、鈴木恵一氏の蓄積がある。そこで、本稿では、鈴木氏の研究を概観した後、実際に聞き取り調査を実施し、その結果を報告したい。

表1 岡野貞一の年譜

西暦	和暦	出来事
1878	明治 11.2.16	邑美郡（現・鳥取市古市）にて、岡野貞一生まれる。
1882	明治 15	鳥取市行徳に住む祖父・平太夫宅に姉とともに遊びに行く。 新地の演劇に興味を持つ。
1883	明治 16.6	貞一一家、吉方 129 番地屋敷の武士長屋に移る。勉強のため町内に移る。
	明治 16.10	吉方学校（現・修立小学校）に入学する。
1886	明治 19.11.30	吉方学校最終学年秋の学期試験で優秀賞を県より授与される。
1887	明治 20.3.30	吉方学校が旭日尋常小学校に改称される。
	明治 20.6	旭日尋常小学校を卒業する。
	明治 20.7	三郡高等小学校（現・久松小学校、明治 22 年 9 月 28 日に因幡高等小学校に改称される）に入学する。
1888	明治 21.11.19	一家で西町 157 番地屋敷へ引っ越す。
	明治 21	永井幸次に連れられて賀露沖へ出て発声練習をする。
1889	明治 22	因幡高等小学校で、遠藤重校長の唱歌の授業を受ける。
1891	明治 24.3	因幡高等小学校を卒業する。
	明治 24.11	鳥取県庁に臨時職員として働く。（～明治 25 年 9 月）
1892	明治 25.9.25	セバランス牧師より洗礼を受ける。
	明治 25.10.2	今岡直織について漢学修行（～明治 26 年 2 月）
1893	明治 26.3	鳥取を離れ、岡山の姉の所へ行く。

杉本友梨 他：鈴木恵一氏への《ふるさと》に関する聞き取り調査

	明治 26.4.10	岡山私立薇陽学院（英語重視）に入学するが、音楽への道に進むことを決心する。
	明治 26	岡山教会のアダムス宣教師や姉夫婦の指導で音楽の基礎や教会音楽を勉強する。
1895	明治 28.6	薇陽学院を中退。東京音楽学校の入試準備のために上京する。永井幸次と同宿になる。
	明治 28.9.16	東京高等師範学校附属音楽学校予科に入学。個人教授、写譜などで学費を稼ぐ。
1897	明治 30.9.11	東京高等師範学校附属音楽学校本科に入学。島崎赤太郎よりオルガン演奏を習得する。 この間、幸田延教授、滝廉太郎、神戸絢、ユンケル教授などの先輩や教授などの演奏を聴き、音楽のすばらしさを体感し、励みとする。
1900	明治 33.7.8	東京音楽学校本科専修部を卒業。
	明治 33.9.17	東京音楽学校研究科に入学。授業補佐としてオルガンと唱歌を受け持つ。
	明治 33.10	東京本郷の教会のオルガン奏者、聖歌隊の指導も受け持つ。
1901	明治 34	東京音楽学校教師として、極めて精勤に勤める。
1906	明治 39	本郷の中央教会での音楽活動も、日曜礼拝のオルガン演奏に加えてクラシック音楽、讃美歌の指導も行う。
1904	明治 37.2	東京音楽学校で楽典、ピアノの教授補助も行う。
1906	明治 39.10.19	助教授に昇任。唱歌の修行を主科とした。
1907	明治 40.9.13	文部省唱歌編纂委員になる。 師範学校、中学校、高等諸学校教員夏期講習会講師補助、1910（明治 43）年より正講師として 1920（大正 9）年までほとんど毎年務める。
	明治 40.11.25	田中寿と結婚する。
1908	明治 41	唱歌編纂委員、夏期講習会講師など、学校授業以外の校務が増大する。 音楽状況視察が加わる。
1909	明治 42	音楽状況視察（三重、奈良、和歌山、岐阜など）
1911	明治 44.5	《日の丸の旗》が尋常小学唱歌第 1 学年用に掲載される。
	明治 44.6	《もみじ》が尋常小学唱歌第 2 学年用に掲載される。
1912	明治 45.3	《春が来た》が尋常小学唱歌第 3 学年用に掲載される。
	大正 1.9.30	師範学校中学高等女学校教員講習会講師を務める。（～昭和 4 年） 《春の小川》が尋常小学唱歌第 4 学年用に掲載される。
1913	大正 2.8.22	田中寿と協議離婚する
1914	大正 3	《ふるさと》《朧月夜》が尋常小学唱歌第 6 学年用に掲載される。
1915	大正 4.1.6	今田ケイと結婚する。
	大正 4.8.20	大礼奉祝唱歌楽譜審査員を務める。
	大正 4.11.22	長男・匡雄が生まれる。
1917	大正 6	文部省唱歌編纂委員解かれる。
1921	大正 10.5.16	教員検定委員となる。（～昭和 4 年）
	大正 10.10.25	文部省視学委員となる。
1923	大正 12.6.25	教授に昇任する。
	大正 12.9.1	関東大震災により、本郷中央教会のオルガンが壊れる。
1924	大正 13	教務掛を任じられる。 鳥取県立高等女学校の校歌作成の依頼を受ける。
1925	大正 14.3.20	妻と長男を連れて、33 年ぶりに鳥取に帰郷する。
1926	大正 15.4.4	次男・貞夫が生まれる。
1928	昭和 3.4	東京音楽学校奏楽堂にオルガンが設置される。
	昭和 3.5.11	生徒監事務取扱い
	昭和 3.9.14	三男・龍平が生まれる。
	昭和 3.12.20	兼任生徒主事を務める。
1929	昭和 4	東京音楽学校に邦楽科が設置される。（←高野辰之が尽力）

1930	昭和 5.1.8	東京音楽学校オーケストラのチェロ担当になる。
1932	昭和 7.2.8 昭和 7.4 昭和 7	教務を嘱託（依頼免本官）し、講師となる。（～昭和 16 年） 東京音楽学校に作曲専科が設置される。 全国各地の校歌を作曲する。（～昭和 16 年）
1941	昭和 16.12.29	急性肺炎のため死去。64 歳。

出典 鈴木恵一『岡野貞一とその名曲：わが国初の岡野貞一伝記本』タクミコーポレーション，2005年。

1. 鈴木恵一氏の略歴

鈴木恵一氏は、1933（昭和 8）年、鳥取県鳥取市に生まれる¹。

鳥取第一中学校，鳥取県立鳥取西高等学校を経て，鳥取大学学芸学部に入學する。鳥取大学在学中，委託生として東京藝術大学音楽学部に進学し，作曲を専攻する。鳥取大学卒業後は，鳥取市立美保小学校，鳥取県立倉吉西高等学校，鳥取県立八頭高等学校を経て，鳥取県立鳥取西高等学校を最後に 30 年間の教職を退く。その間，音楽プロ，音楽教師を目指す多数の子弟を育てる。

1962（昭和 37）年，鳥取市民合唱団創設以来 25 年間指導育成を行う。また，鳥取市少年少女合唱団の設立にも寄与。矢谷学園の 5 つの幼稚園教諭の音楽指導を 5 年間，鳥取福祉会 8 保育園の音楽指導を 3 年間行い，幼児の音楽教育にも携わる。

また，鳥取社会福祉専門学校・県内福祉施設などの指導を通し，音楽の福祉活動への応用を研究，実施する。

童謡唱歌の推進も精力的に行い，現在，「とっとり童謡唱歌の会」の会長を務める。

2. 出版物

鈴木氏は教職を退いた後も鳥取県の音楽文化，福祉の発展のために様々な研究，実践を行っている。その中で，多くの出版物を手掛け，雑誌への寄稿も行っている。ここでは，作曲作品を除く鈴木氏の出版物の中で，確認できたものを挙げる（表 2）。

表 2 鈴木恵一氏の出版物

タイトル	副書名	著者	発行	発行年
因伯春秋 第 9 号 「グループ紹介・鳥取市民合唱団」	特集郷土の祭り	牧野和春	牧野出版	1977
鳥取楽壇の歩み		鈴木恵一/著	鈴木恵一	1982
松の緑に (鳥取西高音楽部，吹奏楽部史)		鈴木恵一/著	鈴木恵一	1986
鳥取の音楽地図	鳥取の音楽を拓くグループ	鈴木恵一/著	鈴木恵一	1988
鳥取県 子どものための伝記	第 2 巻 岡野貞一・日置黙仙・峰地光重	鳥取県小学校国語教育研究会	青葉図書	1988
我が心の青春鳥取市民合唱団 更なる前進を！！	創立 30 周年を記念して	鈴木恵一/著	鈴木恵一	1992
北原白秋とその童謡		鈴木恵一/著	鈴木恵一	1992
鳥取文芸 第 16 号 「童謡館って何？」		鳥取市社会教育事業団		1994
野口雨情とその童謡		鈴木恵一/著	鈴木恵一	1996
鳥取県人物伝	20 世紀を支えたふる	新日本海新聞	鳥取銀行	1998

「10 端正で詩情豊かな曲 を作曲」	さと先人群	社/編		
鳥取文芸 第 21 号 「岡野貞一の住んだ町 古 市一吉方一西町」		鳥取市社会教 育事業団		1999
鳥取文芸 第 22 号 「岡野貞一の名曲そのま まの鳥取市を」		鳥取市社会教 育事業団		2000
私の音楽手帖	鳥取の音楽ア・ラ・カル ト	鈴木恵一/著	鈴木恵一	2001
岡野貞一とその名曲	わが国初の岡野貞一伝 記本	鈴木恵一/著	鈴木恵一	2005
わらべ館 童謡・唱歌研究情 報誌『童夢』創刊号		わらべ館 童 謡・唱歌研究情 報誌『音夢』編 集委員会	鳥取童謡・ おもちゃ館	2007
鳥取文芸第 29 号 「鳥取・因幡を「ふるさとの 歌」でイメージアップを」		鳥取市社会教 育事業団		2007
とっとり童謡唱歌のふる さと		鈴木恵一/著	鈴木恵一	2007
岡野貞一とその名曲		鈴木恵一/著	鈴木恵一	2009
ととりの童謡唱歌 100 景 の曲	歌う会の 32 曲	鈴木恵一/編著	鈴木恵一	
田村虎蔵とその名曲				
弘田龍太郎とその名曲				
海のうた				

出典 鳥取県立図書館データベース, <http://opac.library.pref.tottori.jp/cgi-bin/Sopcpag.sh#>,
2016年1月19日閲覧。

鈴木恵一『岡野貞一とその名曲：わが国初の岡野貞一伝記本』タクミコーポレーション, 2005年。
倉吉市立図書館データベース, <http://www.lib.city.kurayoshi.lg.jp/opac/wopc/pc/pages/SearchResultList.jsp>, 2016年1月26日閲覧。

表 2 から、鈴木氏の出版物、雑誌への寄稿が豊富にあることがわかる。また、《ふるさと》や岡野貞一を取り上げたものだけでなく、鳥取県内の音楽文化の歴史、音楽活動の状況についてまとめた出版物もある。中でも『岡野貞一とその名曲：わが国初の岡野貞一伝記本』『岡野貞一とその名曲』は、岡野貞一に関する重要な資料である。特に、『岡野貞一とその名曲：わが国初の岡野貞一伝記本』に掲載されている資料や写真などは、鈴木氏が東京藝術大学や岡野貞一氏のご子息のもとへ直接足を運び、収集したもので、貴重な一次資料と言える。

略歴や多くの出版物から、鈴木氏は《ふるさと》や岡野貞一の研究、鳥取県の音楽教育・音楽文化の発展のために尽力された人物であることがわかる。そこで、どういった経緯で《ふるさと》や岡野貞一の研究、様々な活動をするに至ったのか、その思いを探るために、筆者は鈴木氏に聞き取り調査を行うことにした。次節では、その聞き取り調査を通して考察していくこととする。

3. 鈴木恵一氏への聞き取り調査

(1) 方法

聞き取り調査の目的は、《ふるさと》や岡野貞一の研究、鳥取県の音楽教育・音楽文化の発展のために尽力された鈴木恵一氏が、どういった経緯で緻密な調査に至ったのか、その思いを探

り、考察するためである。以下の方法で実施した。

1) 実施日時・場所

2015 (平成 27) 年 10 月 21 日 (水) 14:00~16:00 ・ 鈴木恵一氏自宅

2) 調査方法

半構造的インタビュー形式で進めた。あらかじめ筆者が尋ねたい質問をいくつか用意しておき、会話の流れ中で様々なお話を聞くことができた。インタビュー中、本研究とは直接関わりのない内容の会話や、聞き取り不能の部分、個人名、団体名などの個人情報挙げられた部分は省略している。

3) 記録方法

筆者の杉本による書き取りと、ボイスレコーダー2台での録音を行った。聞き取り調査は、後日、筆者の杉本により文字起こしを行い、文字化した。

(2) 聞き取り調査の考察

考察では、主に①鈴木氏が《ふるさと》や岡野貞一の研究を始めようと思ったきっかけ、②《ふるさと》を題材にした授業展開について、③様々な活動を行おうと思った動機、④音楽教育界に望むこと、の4点についてみていくことにする。

1) 鈴木氏が《ふるさと》や岡野貞一の研究を始めようと思ったきっかけ

まずは、筆者がなぜ《ふるさと》と岡野貞一をテーマ据えて卒業論文を書くことにしたのか、その経緯を伝える。その後で、鈴木氏に岡野貞一研究の動機を尋ねた。以下は、聞き取り調査の記録の一部である。

鈴木氏	「ええ。そういうところに注目していただいたってことはですね、僕も岡野貞一の研究っていうのを、40年かな…」
筆者	「はい、昭和40年ですね。」
鈴木氏	「40年から初めているんですけども、それまでどっちかっていうと気が付かなかったんですね。」
筆者	「そうなんですか。」
鈴木氏	「ええ。いい曲だなとか、歌いやすい歌だなとかね。それを作曲した人がね、鳥取市出身っていうことがわかってね、それでびっくりしちゃった。きっかけはやっぱり、岡野貞一の曲を歌おうとするきっかけがあったからかもしれないけどね。」 (省略)
筆者	「だから僕自身は昭和40年にして初めて『ああ、いい曲だなあ』とかね、『メロディーは簡単だけど品位があるな』ってね。」
鈴木氏	「ええ。そういうことは教員になって10年もかかってからようやくわかったことです。」
筆者	「そうなんですね。」

以上より、鈴木氏が教員になって10年間の間に、岡野貞一の曲を歌ったり指導したりする中で、「いい曲だな」「メロディーは簡単だけど品位がある」といった曲の魅力を感じ始めると

もに、その曲を作曲したのが鳥取県出身の岡野貞一だとがわかったことが、研究を始める大きなきっかけであることが明らかになった。

また、次のようにも述べている。

鈴木氏	「それで、ここに書いてあるんだけど、(『岡野貞一とその名曲』 ² を見ながら)岡野貞一のすばらしいところはどこかというところかというところか、ここにもあるように…。名曲《ふるさと》の歌声がこだまして。こんなに歌われ愛されている。これっていうのは、《ふるさと》はよく出ますね。最近は著作権っていう問題があるので必ず著作者を出さなきゃいけない。作詞者と作曲者をね。だからどこかに出ますね。」
筆者	「ええ、出ていますね。」
鈴木氏	「というようなこともあるし、ここにね、だから考えてみたらこうしてたくさんあるのに鳥取県の人は何で気が付かなかったんだろう、なぜやらなかったんだろうとかがって思うんですよね。」
筆者	「ええ、そうですね。」
鈴木氏	「だから、ほんとに岡野貞一さんに悪かったなっていうね。」
筆者	「なるほど、では使命感のような感じですかね。」

以上より、《ふるさと》という曲が、今も多くの人々に愛され、歌い継がれているにもかかわらず、その作曲者である岡野貞一が鳥取県出身だということが注目されなかったことに疑問を感じるとともに、そのことに対する岡野貞一への罪悪感と、貞一の研究をしなくてはならないという使命感が、鈴木氏を研究へと駆り立てたことが明らかになった。

また、インタビューの中で、もっと岡野貞一を研究する人が増えないか、と語る部分もあった。

2) 《ふるさと》を題材にした授業展開について

次に筆者は、本研究において《ふるさと》や岡野貞一を題材にした視聴覚資料を作製し、それを使った授業実践を予定していることを伝えた。それに対して鈴木氏は次のように述べている。以下は、聞き取り調査の記録の一部である。

筆者	「はい。なかなか映像と一緒に見る機会ってなかなか子どもたちってないんじゃないかなって。なかなかこう、鳥取に住んでいると風景とか当たり前になっちゃって気付かないこととかもあるのかなと思って、きっかけを写真なんかで作れたらいいなと思うんですけど。どうなんでしょう。」
鈴木氏	「そうですね。やはり意識して岡野貞一という人をね、鳥取県の人としてもっと頑張ろうかっていう気持ちでやらんとね。どっちかっていうと、今流行りのね、経気のいい歌やね、そういうものになってしまうから。」

以上より、鈴木氏は、まず教師が意識して岡野貞一や鳥取にゆかりのある人物を取り上げようとする気持ちを持つことが必要であると述べていることがわかる。

次に、自身が赴任していた小学校での実践について、次のように述べている。

鈴木氏	「美保小学校っていうところでね、赴任した所でね。合奏させたりね、合奏。」
筆者	「はあ、なるほど。」
鈴木氏	「その時に《ふるさと》を入れると生徒がとっても喜んでね。易しいしね。」
筆者	「そうですね、わりとメロディーは複雑じゃないですもんね。合奏で取り入れてみる…(メモをとる)。ああ、なるほど。」
鈴木氏	「特にあれですね、そのままだったら《ふるさと》かくらいけど、やっぱり僕の所は、それでも歌が主体だったからね。歌の合唱が。それも合唱でも本格的な四部合唱だとかね、三部合唱とかでなくて。」
筆者	「ああ、単純な。」
鈴木氏	「ええ、単純な…。二部合唱や三部合唱やね、」
筆者	「なるほど。合唱も、そうですね。」
鈴木氏	「だからそういう中に合唱の表現の中にね、教材として入れとるのは…入れとくってのをやとったですね。これはまあよかったなあと思ってね。」

以上より、《ふるさと》を題材として扱う際、合奏を取り入れたり、二部合唱、三部合唱といった形態での合唱を取り入れることで、子どもたちの反応がよかったと述べている。このことは、今後の小学校における授業の在り方に活かすことができると考える。

また、最近の《ふるさと》に関する実践の話題にふれながら、次のように述べている。

鈴木氏	「あの、県でね、僕がちょっと提案したことがあったんだけどね。この参考文献の方に…。やっぱり《ふるさと》は『うさぎ 追いし かの山～』あの、ちょっと古い感じを与えるんだな。」
筆者	「そうですね、歌詞がね、古文調で。」
鈴木氏	「それからこないだ山陰放送でやとった人が…。」
筆者	「もしかして、4番を作る人ですかね?」
鈴木氏	「あ、そうそう。」
筆者	「私も見ました。ニュースで《ふるさと》の4番を作ろうプロジェクト。」
鈴木氏	「ああいうふうなことをね、やるのも面白いことだなあと思ってね。」
筆者	「そうですね、やっぱり言葉が伝わりにくいっていう。」
鈴木氏	「うん。『うさぎ 追いし かの山』。かの山っていうのは、僕ら生徒に、かの山って、かの川って何ですかって質問したりね。」
筆者	「ああ、確かに。」
鈴木氏	「かの、ぶーんて飛ぶ…。」
筆者	「ああ、虫の蚊ですかね。(笑い声)」
鈴木氏	「ええ。『つつがなしや』ってどういう意味かわからない。こんなんをね、出しとるでしょう、平気で。これなんかほんとは、教員同士がもっと若い会を開いてね、文部省に・・・(聞き取り不能) しなくていいわけですから。」
筆者	「歌詞をもっとわかりやすくするのはどうかっていうことですかね。」
鈴木氏	「うん、そうそう。それからあの…。」

以上より、まず鈴木氏は、《ふるさと》の古文調の歌詞がわかりにくさを生んでいることを指摘している。そこで、《ふるさと》の4番の歌詞を作る実践を小学生に対してやってみてはどうかと提案している。この実践については、西島央が取り組んでいる³。西島の実践は高校生を対象として行われていたが、これを小学生に向けて行ってはどうか、ということである。このことも、今後の小学校における授業の在り方に活かすことができると考える。

3) 様々な活動を行おうと思った動機

鈴木氏は、合唱の指導や作曲活動、イベントの参加など、鳥取の音楽教育、音楽文化の発展のために様々な活動を行ってきたが、そういった活動の原動力について、次のように述べている。以下は、聞き取り調査の記録の一部である。

鈴木氏	「僕がああ、音楽の曲作りやね、作曲活動をした大きな根源、動機、エネルギーは、岡野貞一さんがね、曲を作られたっていう。」
筆者	「なるほど、偉大な先輩の。」

以上より、鈴木氏が積極的に音楽活動が続けてきた原動力となっていたのが岡野貞一存在であり、岡野貞一が作曲を行っていたということが、自身も作曲活動を積極的に行うエネルギーになっていたと述べている。

4) 音楽教育界に望むこと

インタビューの中で鈴木氏は、最近の音楽教育や教師の在り方について自身の考えを述べる場面がいくつかあった。以下は、聞き取り調査の記録の一部である。

鈴木氏	「そうですね。今度の教育課程っていうのはね、文部省が出したのは、せっかくいい方向にいったらと思ったらまた変わっちゃうんですね。」
筆者	「はい。確か、時間が少なくなりましたよね、音楽の。」
鈴木氏	「そうそう。そしたら今度は剣道だ、柔道だね、あんなほうや家庭科やなんかが多くなってから、(音楽に)手が回らんようになってくる。」
筆者	「そうですね。」
鈴木氏	「それから英語もやらんといけんくなったしね。僕はこれはどうかと思うなあ。」
筆者	「うーん。やっぱり私も芸術に関わってきたので、時間が削られるのはどうかなって個人的にはすごく思いますね。英語とかも大事だけど、芸術も大事だよと、思うんですけど。」
鈴木氏	「僕らが言っただけでは、やってくれんけども…。」

以上のことから、平成10年告示の学習指導要領以降において、音楽の授業時数が減少したことにふれ、鈴木氏はこのことについて残念にとらえていることがわかる。またインタビューの中で、音楽教育の専門家について、ピアノ教師のように個人の指導に優れた人材よりも、集団の指導ができるような人材が育てほしいということも述べている。

5) その他

その他インタビューにおいて、研究を進める中で、自らが岡野貞一のご子息のもとへ足を運び写真を集めたことや、鳥取県内外の岡野貞一ゆかりの地を訪れたりしながら資料を集めたこ

とも明らかになった。また、研究の中で偶然見つかった資料もあった。鈴木氏は、岡野貞一の研究のために、自ら現地まで足を運び資料を集めたりしたことについて、「大変だった」と述べている。このことから、岡野貞一の研究には多くの時間と労力が費やされていることがわかった。

おわりに

鈴木氏への聞き取り調査を通して、岡野貞一の作品に魅力を感じるとともに、《ふるさと》を作曲したのが鳥取県出身の岡野貞一だとわかったことが、鈴木氏が岡野貞一研究を始める大きなきっかけとなっていることが明らかになった。また、今も多くの人々に愛され、歌い継がれている《ふるさと》であるが、その作曲者である鳥取県出身の岡野貞一への注目がなされなかったことに対する罪悪感と、岡野貞一の研究をしなくてはならないという使命感が、鈴木氏を研究へと駆り立てたことが明らかになった。

《ふるさと》を題材にした授業展開については、まず教師が努めて岡野貞一や鳥取にゆかりのある人物を取り上げようとする気持ちを持つことの必要性を述べている。また、合奏を取り入れる、二部合唱、三部合唱などの合唱を取り入れるといった表現活動を取り入れた授業展開や、《ふるさと》の歌詞の解釈について、現代の子どもたちにもわかりやすいようにする工夫の必要性を述べている。

こうして岡野貞一に関する様々な研究を行ってきた鈴木氏であるが、研究の中で岡野貞一の生き方にふれ、そのことが自身の活動にも大きな影響を与えていることが明らかになった。今後の音楽教育について、音楽の学習にも時間をかけて取り組むこと、集団を指導する力を持った教師の育成を望んでいることも語っている。

この聞き取り調査を通して明らかになった、岡野貞一研究に対する鈴木氏の思いを活かしながら、教材開発に取り組んでいきたい。

<謝辞>

本調査を行うにあたり、「とっとり童謡唱歌の会」の会長の鈴木恵一先生からのご協力を得ました（掲載の承諾も得ております）。ここに記して、感謝の意を表します。

<付記>

本稿は2015（平成27）年度鳥取大学地域学部卒業論文「鳥取への愛着を育てる教材開発：岡野貞一《ふるさと》に着目して」の一部である。卒業論文の一部を日本音楽教育学会中国四国地区例会（2016年2月、於：香川大学）において口頭発表を行った。また、その一部を『地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）』第13巻第2号（2016）において、「鳥取への愛着を育てる教材開発：岡野貞一《ふるさと》に着目して」として発表した。なお、本研究は平成27年度鳥取大学地域学部の学部長経費「鳥取への愛着を育てる教材開発」の助成を受けた。

杉本 友梨（湯梨浜町立たじりこども園）

鈴木慎一郎（鳥取大学地域学部地域教育学科）

<注>

-
- ¹ 鈴木恵一『岡野貞一とその名曲：わが国初の岡野貞一伝記本』タクミコーポレーション，2005年。鈴木恵一『鳥取楽壇の歩み』中央印刷，1982年。
 - ² 鈴木，前掲書，2005年。
 - ³ 西島央「百年目までの〈故郷〉，百一年目からの〈故郷〉」わらべ館 童謡・唱歌研究情報誌『音夢』第9号，公益財団法人鳥取童謡・おもちゃ館，2015年。pp.2-15。